製品の科学的宣伝を行うと記されていた．

二宮がエベリングから最初に教わったことは，プロパガンダの相手が医師だから「セールス行為に出ない」というプロパガンダの精神であった．そして翌1912年（明治45）1月からエベリングに同行して欧州式の近代的かつ組織的プロパガンダを開始した．そのやり方は，わが国では全く行われていない方法だった．大学や医師会単位で主要医師を一堂に集め，ポータブル用ディスプレイを用いて製品を展示し，サンプルや文献を使用して，エベリングが講演，それを二宮が通訳，さらに質疑応答を行い，終了後は宴会を開くというものであった．服装は2人ともフロックコートに山高帽を着用し人力車で会場入りした．病院や開業医を訪問する場合も，人力車に乗り，同じ服装で，同じ方法で説明・宣伝を行った．このような宣伝方法や服装は，他社プロパーも真似し，「セールス行為に出ない」の精神と共に引き継がれた．

演者は，こうしたエベリングと二宮が1912年から実施した組織的・学術的宣伝方法とその精神を今日のＭＲ活動の原点と捉え，二宮を日本人プロパーの第一号[1]と位置づけ，2人のプロフィルを紹介した．

3）黎明期のプロパー先人たち

黎明期に活躍したプロパーの先人は，二宮を含め9社10名が確認されている．このうち柳澤保太郎（武田薬品初代新薬部長，グレラン製薬創立者），児玉秀衛（塩野義製薬取締役初代新薬部長），市野瀬潜（京都新薬堂を興し，日本新薬創立者），林　四郎（鳥居商店初代新薬部長）の4先人を紹介した．

プロパーの名称がMRに変わっても「情報提供」を通して自社製品の普及，つまり「販売」を図る目的は，誕生した百年前から変わらない．そのため両者のバランスを取りつつ，如何にプロモーション活動を行うかが，今日の製薬企業とMRにも引き継がれている課題である．

1）西川　隆：明治末期から近代的欧州式プロパガンダを実践した最初の日本人MR二宮昌平薬剤師の素顔．薬史学雑誌 2007；42(2): 131–6

（平成24年12月例会）

口蹄疫の歴史

――その流行と防疫の変遷，現在の課題――

杉浦　勝明

口蹄疫は，口蹄疫ウイルス（Picornaviridae Aphthovius）の感染により生じる偶蹄類動物（牛，水牛，めん羊，山羊，鹿，豚，イノシシなど）の感染症である．現在でも一部の清浄国を除き，世界中で発生がある．口蹄疫ウイルスは感染家畜の生産性の低下をもたらすほか，伝播力が強く，清浄国に一旦侵入すると大きな被害を生じることから，国際的に最も重要な家畜の感染症の1つとして位置付けられている．

口蹄疫の発生に関する明確な記述は，1546年イタリア人修道士Girolamo Frascastoroによるが，その頃までにヨーロッパ，アジアなどで広く流行していたと推定される．19世紀半ばには南米にも侵入し，20世紀初までにはオセアニア諸国，日本，北中米を除き，世界中で流行を繰り返していた．

ヨーロッパでは，1960年代まで口蹄疫は広域流行を繰り返していた．防疫措置として，第2次世界大戦前までは，大部分の国で弱毒ウイルスの接種（Aphthisation），高度免疫血清の投与などが実施されていたが，十分な効果はなかった．口蹄疫の清浄化が進んだのは，戦後不活化ワクチンが開発されて以降で，ヨーロッパでは1950年代に

従来の防疫方法がワクチン接種に変更され1960年代以降牛を対象としたワクチン接種が一般化したことにより発生が激減し，1990年代初までにワクチン接種を中止し撲滅を達成した国が続出した．一方，ワクチン接種の中止と経済統合による人の交流・物の流通の自由化により，一旦侵入するとまん延しやすい状況ができあがり，2001年の英国などにおける大流行につながった．

南米では，19世紀半ばにヨーロッパからの種畜の輸入により口蹄疫が侵入し，定着していたが，1990年代初めまでにワクチン接種により発生がなくなり，一部の国・地域（アルゼンチン，ブラジル南部地域，パラグアイ，ウルグアイ）では，ワクチン接種が中止された．しかし，1990年代末の世界の口蹄疫の発生の増加により侵入リスクが高まる中で，2000年代初頭に口蹄疫の発生をゆるし，その後ワクチン接種を復活している．

アジアでは，ほとんどの国で流行し，特に牛を役畜として農業に使用する東南アジアでは口蹄疫の感染により役畜としての能力が失われることから大きな被害を与えてきた歴史がある．台湾・韓国は長らく清浄であったが，1997年に台湾で発生し輸出産業としての養豚業は破滅した．韓国では2002年および2011年に発生し，2011年には感染が韓国全土に広がったことから，全国的なワクチン接種に踏み切った．一方，フィリピンおよびインドネシアは，防疫政策が効を奏し，それぞれ2011年および1996年以降清浄国となっている．日本では，2000年に92年ぶりに宮崎県および北海道の4農場で発生があったほか，2010年に宮崎県で297農場で発生し，30万頭近くの牛・豚が殺処分された．

このように，口蹄疫の世界の状況をみると，ほとんどの国で今だ発生しているか，清浄化が達成されていない中で，①新興国における畜産の大規模化，②人の国際交流の増加，③人と野生動物の接触の増大，③動物・畜産物の国際取引の増大，④清浄国における口蹄疫ワクチン接種の中止などにより，清浄国においても侵入し，一旦侵入すると大流行を招きやすい状況となっている．また，発生すると大量の家畜の殺処分により大きな被害を生じるだけでなく，発生地域における移動制限と殺処分により動物福祉上の問題や人・物流の制限による観光産業への影響の問題も生じる．2011年に牛疫が世界から撲滅されて以降，途上国も含めた口蹄疫ステータスの改善に向けて国際機関などが中心となり国際的な協力の取組みが強化されている．

（平成24年12月例会）

伊澤信平と歯科医術

――ハーバード大学に留学した蘭軒の孫――

樋口　輝雄

明治中期から大正初年にかけ本邦歯科界で指導的立場にあった伊澤信平は，江戸後期の考証医家として名高い蘭軒伊澤信恬の孫である．蘭軒とその末裔の事績は，鷗外森林太郎の史伝『伊澤蘭軒』に詳しい．史伝は大阪毎日新聞，東京日日新聞に大正5年（1916）6月より翌6年9月の間，371回にわたり連載されたが，その後半は蘭軒没後の文政12年から大正6年まで約90年間の後裔ならびに門人を叙述する．子孫のことは蘭軒および杉田玄白の曾孫伊澤徳（いざわ・めぐむ，1859–1944）が供した資料によるが，鷗外は『伊澤蘭軒』の冒頭で，伊澤家には蘭軒の高祖父・有信が興した「宗家」，宗家四世信階が分立し子の蘭軒が継いだ「分家」，蘭軒の子柏軒信道が分立した「又分家」があると述べ，宗家は麻布鳥居坂町の信平，分家は牛込市ケ谷富久町に居住する徳，又分家は赤坂